

図書館と書店の併設空間における共生と競合

成田 沙紀

近年、図書館と書店の関係は変化している。従来、図書の貸出は図書館で行われ、図書の購入は書店で行われるといったように、それぞれの施設は独立し、役割を果たすことが多かった。しかしながら、近年では、役割の異なった施設をひとつの施設内に含めるといった図書館と書店を併設するといった連携がみられるようになった。

図書館と書店の併設において、運営者はどのように両者を棲み分けているのか、また、利用者はどのように使い分けを行っているのかが明らかになっていない。そこで、図書館と書店の共存方法を見出すことを目的とし、本研究においては、図書館と書店の棲み分けの工夫、使い分けの方法を把握することを目的としている。

研究方法としては、図書館と書店の併設が行われている施設において、運営者を対象に半構造化インタビューを、利用者を対象に質問紙調査を実施した。運営者へのインタビューでは、図書館館長、市職員、書店運営者を対象に、併設に至った背景や目的、また棲み分けの工夫を尋ねた。また、利用者への質問紙調査では、施設の利用者を対象に、図書館と書店の利用頻度と、貸出や購入した本の種類等を尋ねた。質問紙調査においては、平日と休日の2日間で250枚配布したところ、206名から回答を得られ、回収率は82%であった。

運営者側の棲み分けの工夫は、特に大きく行われてはいなかった。しかしながら、図書館図書館が併設されている施設の運営者からは、利用者にとって図書館と書店で、様々な情報を得られるような場所をつくるといった共通認識がもたれていた。この認識は、利用者調査の結果からも表れており、図書館と書店が併設されているメリットとして、より多くの様々な本と出会える、と回答者の38.9%が回答していた。このことによって、図書館と書店の併設は、より多くの様々な本を得られるというメリットとして利用者に認識されていると考えられる。

加えて、図書館と書店の使い分けに関しては、図書館で借りられる割合が1番高い本は「単行本」で28.9%、書店で購入される割合が1番高い本は「雑誌」で20.8%であるということが明らかになった。この結果から、価格帯が高く、種類が豊富な本は、借りられる割合が高く、週や月で情報の更新が行われ、常に最新の情報を持ち、価格帯も高くはない本は、購入されるの割合が高いと考えられる。同様に、価格帯が高く、所有場所を多くとる本は、図書館で借り、図書館にあまり蔵書されておらず、自身で所持しておきたいと感じる本に関しては購入するといった使い分けを行っていると考えられる。

今後は、今後は調査地を増やし、より多くのデータを集め、他の併設されている施設との比較を行っていききたい。

(指導教員 池内淳)